

人間関係を広げる視点から俯瞰した里親制度の意義

元 愛知新城大谷大学・吉川知巳

【背景】

児童養護施設には、近年、子ども虐待による入所が増えてきている。虐待を受けた事実は子どもの成長に大きなダメージを与える。山田は心理的影響だけでなく、入所までの過程でかかえた負因である貧困や社会的孤立といった生活史が子どもの成長に影響を与える¹⁾。松本は子どもを施設へ入所させる背景にあるものは、貧困であろうと指摘している²⁾。山野は貧困問題は経済的問題だけでなく、疎外感がつきまとうと述べている³⁾。つまり、児童養護施設へ入所する子どもの家庭には経済的問題と孤立が存在する。

以上のような家庭で育った子どもは「人間関係」を広げて「施設2世」を防止する観点から児童養護施設ではなく里親委託によって対応していくことがよいことを述べる。なお、本稿では施設とは児童養護施設のことである。

【方法】

子どもの貧困や里親についての研究は、社会福祉学を中心に行われている。したがって、これらの文献を調査した。また、社会学や教育学の分野でもこれらの研究は行われており、これらの文献の調査も行った。

【結果】

厚生労働省の2008年の調査では、3万1593名の子どもが施設で生活している。両親の虐待・酷使14,4%,両親の放任・怠惰13,8%,両親の就学9,7%などである。この点について、浅井は子どもにとって最も深刻な貧困の現れ方は虐待だと指摘している⁴⁾。児童福祉司の川崎も相談のなかで虐待問題は貧困問題があると報告している⁵⁾。しかし、社会は親が悪いと怒りを向ける。が、彼らの親の取り結ぶ「人間関係」は希薄だ。

杉山は、子どもと良い関係を保持するには、母親自身が夫や実親など生き生きとした安心できる交流をもつとが大切だ⁶⁾。が、虐待している親は社会的に孤立している。背景には、親の大半が不安定な就労条件で働いているため、地域社会との交流・対話をする余裕がないのだ。他方、子どもの「人間関係」も親と同じで狭い。暴言・暴力を経験しているから自分に自信がなくて、交友関係も希薄だ。こうした姿勢で施設から学校へ行く。

そこでは、施設に対する差別や偏見があるから学校でも友人も多くはない。成績は、入所前の養育環境がよくないため、振るわない。三浦によると「成績が良くない子どもは友人が少なく、運動が苦手だ」と指摘している⁷⁾。だとすると、

彼らは学力が低いから「人間関係」が希薄だ。且つ、運動が苦手なので開通な学校生活を送ることができなかったのではないか。

【考察】

本稿では、「人間関係」を広げる観点から、里親のもとで養育されることを提唱したい。

里親の植原は、里子は家では“のびのび”としている⁸⁾。施設は団体生活であるから色々な規則やルールがある。しかも、年長の子への気兼ねなどもある。しかし、里親による虐待は2009年の厚生労働省の調査によれば、9件だ。が、里親になる人はホットな家庭で育った人であると村木は報告している⁹⁾。

【結論】

本研究では、施設入所前・後は子どもの「人間関係」が希薄であることを考察した。この是正の観点から里親で養育されることがよいことを提案した。「人間関係」が豊富だと、コミュニケーション能力が巧くなり、自分の子どもを施設へ追いやる「施設2世」を防ぐ一助になろう。

【文献】

- 1) 浅井春夫：子どもの貧困 明石書店 2010.
- 2) 松本伊智朗：児童養護施設が子どもを貧困から守る砦であるために. 児童養護 40(3)pp2-3, 2010.
- 3) 山野良一：子どもの貧困対策基本法の制定を. 社会福祉セミナー23(79) :pp2-3, 2010.
- 4) 浅井春夫：脱子どもの貧困への処方箋 新日本出版社
- 5) 川崎一二彦：児童虐待 岩波書店 2006.
- 6) 杉山春：ネグレクト 小学館 2002.
- 7) 三浦展：格差が遺伝する！ 宝島社新書 2006.
- 8) 家庭養護促進協会：里親になってよかったエピソード 2005.
- 9) 村田和木：家族をつくる 中公新書 2005.